

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年4月25日現在

機関番号：34428

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011年～2012年

課題番号：23720256

研究課題名（和文）フレイジオロジーの考え方を取り入れた英語の変則的構文・表現の記述的研究

研究課題名（英文）A phraseological and descriptive study of irregular constructions and expressions in English

研究代表者

住吉 誠（SUMIYOSHI MAKOTO）

摂南大学・外国語学部外国語学科・准教授

研究者番号：10441106

研究成果の概要（和文）：フレイジオロジーの観点から、英語の変則的な構文・表現を考察し、その形成過程や使用実態についてコーパスなどのデータをもとに記述研究をおこなった。2年間の研究期間で *not only but that* の接続副詞化、動詞・形容詞がとる Valency patterns の実態、*on account of* の接続詞化についての議論の見直し、*please-placed to*-infinitive clauses などについて調査・研究をおこなった。ほぼ当初の予定通りに、具体的な言語データに基づき、それらのフレーズの振る舞いを明らかにし、その成果について国内外で口頭発表ならびに論文などを公刊した。

研究成果の概要（英文）：This project aimed at delving phraseologically into irregular English constructions and expressions consisting of more than one word. During the two years of research, a wide variety of constructions and expressions showing some kind of irregularity were dealt with, including the newly-created conjunct *not only that but*, verb and adjective valency patterns, *on account of* as a clause linkage marker and *please-placed to*-infinitive clauses. As scheduled at the beginning of this project, it revealed many interesting facts concerning these irregular constructions, on the basis of empirical data from corpora.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|-------|-----------|---------|-----------|
| 交付決定額 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：フレイジオロジー、変則的構文、英語の語法、英語の実証的研究、複合前置詞句、valency patterns、phrases

1. 研究開始当初の背景

（1）フレイジオロジー研究の台頭：語彙を中心にすえて連鎖表現を研究対象とするフレイジオロジーがヨーロッパで台頭していた。フレイジオロジーは、コロケーション、個々の語がとるパターン、成句、ことわざといった多種多様な連鎖表現を射程に入れているが、その根本にあるのは、語彙を中心に据えて syntagmatic な連鎖の意味と形の対応関係を見るということである。ヨーロッパでは

フレイジオロジーを専門とする学会が設立され、2年に一度国際大会も開催されている。代表者も参加し口頭発表を行ったことがあった。

フレイジオロジーは多種多様な連鎖現象を扱うが、代表者がそれまで語法研究の対象としていた動詞のパターンや *on account of* といった複合前置詞句も連鎖表現の一種であり、フレイジオロジーでも扱われるべき事例であった。フレイジオロジーの源泉は、日本

の英語教育の黎明期を担った Palmer や Hornby が推進したコロケーションや動詞型などの研究にあり、代表者が専門とする語法文法研究と親和性が強かった。日本の語法研究とヨーロッパのフレイジオロジーは方向性を同じくするふたつの支流であり、これらを統合的する機が熟しつつあった。

(2) 変則的連鎖表現のデータの蓄積と実態解明の必要性：代表者が手作業でデータを収集する中で、従来の統語論中心の文法研究では関心を持たれなかったような興味深い構文や変則的な表現に出くわしていた。その代表的なものが、前置詞 until 句が動詞 have の目的語になって形成される have until X to V という連鎖である。この連鎖は「X の時まで V する」という期限の意味を表し、until のもつ継続の意味は顕在化しない特殊な形である。さらに、大規模な英語コーパスが構築され、英語研究に利用できるような環境が整い、従来考えられた以上に英語の実態が複雑であることがわかってきた。代表者が手作業で集めたような興味深い変則的な例も決して孤立例ということではなく、日常的に使われていることがわかってきた。

言語話者の直観に頼るだけでは、こういった従来の理論の枠組みから零れ落ちる事例を詳細に調査することは望むべくもなかった。従来の枠組みに収まらない英語の個別事象は、語法研究の分野で扱われるべきであるが、語法研究も従来の枠組みを基本的な土台とせざるを得ない部分があった。変則的な形は文法規則に従って形成されるのではなく、連鎖表現として固まったものとして作られる。そのため、このような多種多様な英語の構文や表現を説明し、英語の実態を解明するためには、フレイジオロジーの考え方を取り込んだ、新しい視点での記述的研究が必要と考えた。このような統合的な視点は英語の実態を今後解明していくうえでも不可欠なものである。

2. 研究の目的

(1) 蓄積されたデータからの変則的構文・表現の発掘：これまで気づかれていなかった変則的な構文や表現を、コーパスから発掘する。また、代表者の手元にすでにあった例に関しても、大規模なコーパスを使用した頻度調査を行い、かつ、事例の数を増やすことも射程に入れていた。収集した事例により、英語の実態は、従来考えられていた以上に多様であることを示すことが重要な目的であった。

(2) フレイジオロジーの観点を取り入れた説明の提示：have until X to V といった、従来注目されてこなかったような変則的な

表現の実態を、フレイジオロジーの考え方を取り入れて説明することが第2の目的であった。連鎖は内部構造を意識しないまま、ひとつのユニットとして選択されるが、単に「選択される」ではなく、「なぜ」そのような選択がなされるのかを説明しなければならない。変則的な個々の連鎖が生じるメカニズムを解明し、理論的な立場や英和辞典の改良にも資するような良質な記述的英語研究を目指すことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) データの徹底利用：すでに構築された大規模コーパスを徹底的に利用して、変則的な構文や表現の発掘、データの収集に努めた。変則的な構文や形は、従来のコーパス検索アルゴリズムでは収集することが難しいため、手作業で集めた例を出発点とし、それらを検索のヒントとして「用例回りコーパス行き」という方法もとりながら、コーパスに含まれるデータの取りこぼしのないようにした。

(2) 最新知見の獲得：毎年刊行されるフレイジオロジー関連の書籍から最新知見の徹底的な吸収を行い、この分野の研究の動態の把握に努めた。またフレイジオロジーは日本ではまだなじみのないものなので、ヨーロッパのフレイジオロジー学会に参加し、研究者と意見交換も行った。変則的な形は、言語変化が顕在した形である可能性もあるため、言語変化に関する知見も貪欲に吸収した。

4. 研究成果

(1) データの収集と蓄積：コーパスから変則的な構文・表現の例を収集し、頻度調査などをおこなった。手元にあった少数の例は、COCA をはじめとする大規模コーパスで検索し直し、頻度調査を行うことができた。事例の発見やすでに発見していた事例の追加調査、それぞれの事例の出現頻度の把握など、その成果は、以下で述べる個々の具体的な事例研究に利用した。また、手作業で収集したデータは、そのつど電子化し利用することができた。

(2) フレイジオロジーの考え方を取り入れた、英語の変則的構文・表現の実証的研究の進展：英語の変則的な構文・表現を2年間で集中的に扱うことができた。研究の対象となった事例は多岐にわたるが、主なものは以下の通りである。

① not only that but などの接続詞副詞化についての研究：接続副詞を扱った古典的な研究である Greenbaum (1976) では、接続副詞は閉じた類であり、新たな成員は増えないとされていた。しかし、英語の歴史を通じて

みても、接続副詞(たとえば *therefore* など)は、いくつかの語の連鎖(前置詞 + 指示代名詞)が固まって形成されたものであり、同じ生産方法で現代英語でも新たな接続副詞が生まれている。連鎖を扱うフレイジオロジーの観点から、変則的な連鎖である *not only that but* を主とした接続副詞を調査した。その結果 *not only that but* が使用され始めた時期や、その使用実態を明らかにすることができた。*sentence-builder* としての相関接続詞 *not only X but also Y* は、*not only that but* という接続副詞になると *discourse organizer* として機能する。加えて、その調査過程で *alongside that* などいくつかの接続副詞が新たに生まれつつある状況も指摘することができた。この研究の成果は、2011年ドイツで行われた ICLCE4 で口頭発表し、海外の研究者と意見交換することができた。

② 動詞・形容詞などの Valency patterns についての研究：個々の語がとる Valency patterns は決して不変のものではなく、意味的に類する語の Valency patterns の影響を受けながら常に流動的に動いていることを明らかにした。ひとつ具体的な例をあげれば *assert + that...* の存在が *claim + that...* を生んだように、*agree + to V* の存在が *accept + to V* を生んでいる。動詞・形容詞がとるこれらのパターンは、フレイジオロジーの中でも特にパタングラマーの分野で精力的に研究がされているが、時代を現代英語に限定せず、言語変化との関連で通時的にこの問題を考える必要もある。本来は取るはずのないパターンを取るようになるという意味で、これらの形は「変則的」である。コーパスの頻度調査などに基づいて、いくつかの動詞・形容詞が従来指摘のなかったパターンをとるように変化していることを明らかにした。この研究の成果は 2012年スロベニアで開催された Europhras 2012 で口頭発表することができた。

③ 複合前置詞句 *on account of* の接続詞化の研究：複合前置詞句 *on account of* が接続詞として使用される場合があることは、今までも知られていた。このような変則的な形に説明を与える際には、省略といった説明が与えられることがしばしばある。*on account of* の接続詞用法については、これまでほぼすべての研究が *on account of the fact that...* からの省略現象であると考えていた。代表者の手元には、接続詞として使用されている実例が多く蓄積されていたが、この接続詞用法の発生のしくみを解明するまでには至っていなかった。アメリカ英語の通時的大規模コーパス COHA のデータを使用し、そこ

に含まれる 19世紀から現在にわたる *on account of* の例をすべて子細に検討し、*on account of* の接続詞用法が *on account of the fact that...* という連鎖よりも、先に使用されていることを明らかにした。これにより、単なる省略といった現象ではなく、*on account of* という連鎖はそのまま機能転換され接続詞化すると主張した。これは、「語の連鎖は文法的にひとつひとつ組み立てられるのではなく、内部構造を意識しないまま選択される」というフレイジオロジーの中核をなす考え方の当然の帰結である。この成果は、2012年12月、セルビアで行われた ELLSEE で口頭発表し、参加した研究者と活発な意見交換をすることができた。

④ *Please-placed to*-infinitives の研究：

I ask you to please say no to this sale. といったように *to* 不定詞句の中に *please* という副詞が生起する場合がある。これらは、従来分離不定詞とであると分析されてきた。しかし、子細にコーパスの例を検討すると、… *as the stewardess advises passengers to “please take a moment to ignore the safety information card in your seat back pocket.”* のように、当該部分が引用符に囲まれた例や、… *she simply asked the comtesse to “please use your credit and …”* のように、*to* 不定詞内の代名詞が reporter の視点で転換されず間接話法の特徴を示していない、すなわち、直接話法になっている場合がある。*to* 不定詞のマーカである *to* は前置詞から文法化したものであるが、さらに直接話法を従える引用符へ変化している(文法化)途上にある可能性を主張した。これらの変則的な例は「動詞 + 目的語 + *to* 不定詞」という決まった構文の中で使われ、この一定の連鎖の中で、命令文の直接引用形式として発達してきていると考えられる。

⑤ その他：研究年度以前に調査・発表していた *have until X to V* の変則的構文について、その後の進展を合わせて、論文として公刊した。

(3) 国内外における位置づけとインパクト：この課題研究で、フレイジオロジーの考え方を取り入れながらどのように英語の記述的研究を推進していくか、その一端を示すことができたと考える。また、このような研究が新たな議論を生み、英語のさらなる理解を促進するものと考えている。例えば、*have until X to V* の議論は理論的な立場の研究者からの反応もあったほか、一部の英和辞典の記述に採用されるに至った。*Please-placed*

to-infinitive clauses の口頭発表においても、聴衆からさまざまな意見をいただいた。この研究期間中に行った事例研究は、国内の英語研究に少なからずインパクトを与えたものと思う。

またこの研究期間中、国外の学会において3回口頭発表する機会を得た。フレイジオロジーは主にヨーロッパでさかんに行われているが、その学会に日本人研究者が参加して研究成果を発表し、意見交換を行うことは、海外の研究者に新たな視点を提示し、日本の研究者と海外の研究者のシナジー効果を期待できる。2011年、ヨーロッパの研究者と日本のフレイジオロジー研究者が共同で論文集を発刊したが、その続編も準備中である。その続編には、この研究期間中に行った研究の一部が公刊される予定であり、代表者が行ってきた研究がヨーロッパの研究者にも関心を持たれていると考える。

フレイジオロジーは、単なることわざやイディオムといったものにとどまらず、広く英語一般の理解を深化させるのに有効な研究の在り方であることを、国内外で示すことができたと考える。

(4) 今後の展望

① 論文の公刊：研究期間中に行った研究の一部はすでに公刊されているが、その他に現在審査中のものが3件ある。

② データのさらなる活用：この2年の研究期間中に多くのデータが収集蓄積されたが、説明を提示することのできた事例はその一部である。変則的な構文・表現の事例はまだ数多くあり、今後もこれらを整理・説明していくことで、英語の理解を促進することが期待される。

③ 英語の複雑な実態の解明：この課題研究で扱ったような変則的な構文や表現は、従来の文法理論では埒外に置かれる傾向があった。フレイジオロジーの考え方を取り入れることで、これらがはじめて議論の中心に置かれ、その結果、英語の実態はこれまで以上に多様かつ複雑であることが明らかになる。フレイジオロジーの考え方を取り入れた実証的な研究は、現代英語の実態をさらに克明に浮かび上がらせていくと考えられる。言語データに基づいた精緻な記述研究は、理論言語学の進展のみならず、辞書の改良や英語教育の改善といった点で大いに貢献できる。

④ フレイジオロジーのさらなる進展と日本での浸透：フレイジオロジーは多種多様な現象をその射程に含めているが、ヨーロッパの研究者の多くはパターンや変則的な構文には関心を向けていない。日本人研究者の目から、

さらに多くの事象がフレイジオロジーの射程に含まれるべきであることを主張し、フレイジオロジー自体の発展に寄与できると考えられる。また、フレイジオロジーを専門とする日本人研究者はまだ多くないが、フレイジオロジーの源泉が日本の英語教育を担ったPalmerやHornbyといった学者、さらにはこれらの人物に影響を与えた斎藤秀三郎にあることを考えれば、日本の研究者にはフレイジオロジーは親和性の高いものである。この課題研究で、フレイジオロジーの観点を取り入れた英語研究が、従来の文法理論以上に有用であることを示すことができた。今後日本にもフレイジオロジーが浸透していくことが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計5件)

(1) Makoto Sumiyoshi, Phrases shaping up!: Phraseology and language change, The Seventh Conference of the Japan Society for Phraseology, 2013年3月16日、早稲田大学

(2) 住吉 誠, 現代英語の変化を考える—“please”-placed “to”-infinitives を題材に—, 2012年12月15日、関西英語語法文法研究会第25回例会、関西学院大学

(3) Makoto Sumiyoshi, “On account of” as a clause linkage marker, 2012年12月8日、4th International Conference of English Language and Literature Studies: Embracing Edges (ELLSEE), English Department, Faculty of Philology, University of Belgrade (Belgrade, Serbia)

(4) Makoto Sumiyoshi, Valency patterns in dictionaries, 2012年8月28日、Europhras 2012, University of Maribor, Maribor, Slovenia

(5) Makoto Sumiyoshi, “Not only that” as a conjunct: the emergence of a new connective adverbial in present-day English, 2011年7月22日、4th international conference of the linguistics of contemporary English, University of Osnabrueck, Osnabrueck, Germany

[図書] (計5件)

(1) Makoto Sumiyoshi 他、開拓社、*Kyoto Working Papers in English and General Linguistics (2)*, 2013, 1-337

(2) 住吉 誠 他、開拓社、『21世紀英語研究の諸相 言語と文化からの視点』、2012、1-556

(3) Makoto Sumiyoshi 他、Schneider

Verlag Hohengehren GmbH, *Phraseology and Discourse: Cross Linguistic Corpus-based Approaches*, 2012, 1-448

(4) Makoto Sumiyoshi 他、University of Bialystok Publishing House、*Research of Phraseology in Europe and Asia: Focal Issues on Phraseological Studies (Intercontinental Dialogue on Phraseology, Vol. 1)*、2011、1-437

(5) Makoto Sumiyoshi 他、開拓社、*Kyoto Working Papers in English and General Linguistics (1)*、2011、1-360

6. 研究組織

(1) 研究代表者

住吉 誠 (SUMIYOSHI MAKOTO)

摂南大学・外国語学部外国語学科・准教授

研究者番号：10441106

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：